


海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	立石 晶子 
所属機関	亀田総合病院 / 国立がん研究センター中央病院
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	世界気管支鏡学会総会 20 th World Congress for Bronchology and Interventional Pulmonology
渡航期間	自 2018/6/12 至 2018/6/18
・研究内容 ・国際学会・会議内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ The utility of transbronchial rebiopsy for peripheral pulmonary lesions in advanced non-squamous, non-small cell lung cancer ・ 20th World Congress for Bronchology and Interventional Pulmonology
<p>研究成果</p> <p>2018年6月12日から18日にかけて、がん研究振興財団の「海外派遣研究者への助成事業」から助成を得て、アメリカのロチェスター(ミネソタ州)に参加させていただきました。6月13日から17日にかけて開催された WCBIP20th に参加し「The utility of transbronchial rebiopsy for peripheral pulmonary lesions in advanced non-squamous, non-small cell lung cancer」という演題で、ポスター演示を行いました。</p> <p>発表内容としては、以下の通りです。2014年8月から2017年7月までの間にがんセンター中央病院呼吸器内視鏡科で進行非扁平上皮、非小細胞肺癌の末梢肺病変に対して気管支内視鏡検査(EBUS-GS法)を施行した全301例を対象とし、何らかの治療を受けた後の生検群(再生検群)と治療導入される前に施行された生検群(初回生検群)とで診断率と遺伝子検査成功率を比較した。また、TBBの診断率に寄与した因子を単変量、多変量解析を用いて抽出した。再生検群106例のうち気管支内視鏡検査で有意な病理学的所見が得られたのは92例であり、診断率は86.6%、初回生検群195例のうち気管支内視鏡検査で有意な病理学的所見が得られたのは177例、診断率は90.8%であり両群の診断率に有意差は認めなかった($p=0.287$)。また、再生検群、初回生検群それぞれで遺伝子検査を提出した症例の検査成功率は、再生検群で71例中66例、成功率93.0%、初回生検群で134例中126例、成功率94.0%であり、両群の成功率に有意差は認めなかった($p=0.765$)。また、気管支内視鏡検査による診断可否を単変量および多変量解析により検討を行ったところ、CT bronchus sign陽性と病変分布が中枢側2/3であることが気管支鏡検査の診断予測因子であり、末梢肺病変に対する気管支鏡診断では再生検においても初回に劣らず高い診断率が得られると結論付けられた。</p> <p>これとともに、最新の気管支鏡技術、AIなどのセッションを中心に口頭演題、シンポジウムを聴講しました。気管支鏡による診断率の向上に関して世界中のエキスパートが議論を行いAIやロボット工学の分野からも新しい発表があり気管支鏡の進歩や可能性を肌で感じる事ができました。今回助成を受け、WCBIP20thに出席させていただき大変貴重な経験をすることができました。この経験を日々の臨床、今後の研究にも生かし日本のがん研究の一助となれるよう精進していきたいと考えております。有難うございました。</p>	